# Ｄ・Ｇｒａｙ-Ｍａｎ～転生した男～

ファイター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｄ・Ｇｒａｙ－Ｍａｎ～転生した男～

【Ｎコード】

Ｎ２４８７Ｙ

【作者名】

ファイター

【あらすじ】

目を覚まして、一番初めに見たモノは知らない天井だった。

## 黄金の剣を持つエクソシスト（前書き）

勘違いにしたいです。

# 黄金の剣を持つエクソシスト

普通に生活して、普通の日常を送り、普通の学校に通い、普通の会社に勤める。

そんな、普通の男がＤ灰の世界に生まれる物語。

最初は、生まれ変わって小説に出てくる転生して、何かをやるのか？と思い生活すること十年。
もうないな。そう思って湖に出かけた途端、運命的な出会いを果たす。

だが、その運命の相手と言うのはＡＫＵＭＡだった。

そこから始まる男の物語。

この物語の主人公は微妙に勘違いされます。
外見は金髪に蒼い目ですが、心は現代の日本人です。

## エドワード（前書き）

D灰の小説って少なくね？

そう思って書き始めました。

## エドワード

白金色の髪の少年は、湖の畔で無防備に寝転がっていた。視線の先にはどこまでも青い空が広がっていた。それは、少年の心とは真逆だった。空が晴天なら、少年の心は曇天。いや、台風レベルかもしれない。それほどまでに少年の心はモヤモヤしていた。

「……」

白い手を空に伸ばす。小さくて、今にも壊れてしまいそうな手。既に六年も見続けているのに、未だに違和感は拭えないでいた。自分の体なのに、この気持ち悪い違和感。

「どうして、こうなっちゃったんだろうな」

酷く高くて、幼い声に少年は再び気持ち悪い違和感を覚えた。上半身を起こし、頭を振う。
そして立ち上がり、着ている者を全て脱いで目の前の湖に飛び込んだ。

日が暮れた頃、少年――エドワード――は焚火に手を向けていた。
そこは、森の中にある広場だ。数メートル先にはログハウスがある。
そこがエドワードの拠点だった。
拠点、と言うよりも家だ。森の奥にあるたった一つの家。それがエドワードの全て。

目が覚めると、家の中で倒れていたのだ。当然の如く取り乱した。
突然、意味不明な場所で倒れていたのだ。取り乱さなくては只の変質者だ。それが数十分だったのか、数時間だったのかはわからない。
けど、この時、エドワードは自分の視線が低いことに気づいた。
手は白すぎて、今にも壊れてしまいそうなくらい小さい。視界の半分は白金色で埋め尽くされている。そして、鏡を見て叫んだ。悲鳴のような叫び。

自分が自分じゃない。それは、まさにこのことを言っている様だった。
日本人だった自分は、明らかにアメリカやイギリスに居そうな白色の肌。白金色の髪。
エメラルド色の瞳。元は日本人の成人男性の平均程度はあった身長が縮んでいたこと。

理解するのには時間を有した。そして、理解すると穴だらけだった心が満たされるような。
そんな不思議な満足感。

エドワードは、傍に置いてあったノートを取り出した。タイトルは「?」なんの捻りもないタイトル。ページを捲ると、冒頭には「転生した」と書かれていた。

## エドワード（後書き）

短いです。

こちらの小説の更新は遅れがちで。夜天の主と黒い騎士の方を優先させますので。

## 遭遇（前書き）

難しいな

## 遭遇

今までに書いた日記を読んでいく。ページの隅には「鈴木一郎」の名前が書かれていた。
その下には「エドワード・S・ウェルスター」と書かれていた。
他には「転生した」というワードは数十は書かれている。他にも「歳を取らない？」「不老不死」「森からでれない」「吸血鬼」「死なない」等のワードが書かれていた。これに書かれているものは全て事実だ。

事実、と言うのだから実験はした。まず、森からは一歩も出られなかった。木に目印を付けてある程度進むと、目印を付けた木に戻っていた。歳を取らないのも時間がたてば解ってしまった。エドワードは七歳前後の筈なのに、まったく成長しなかった。
何度も死のうとしたけど、体には傷一つ着けられなかった。湖に潜って溺死しようとしたけど、死ねなかった。むしろ、息は何時までも続くし体の調子だって良くなってしまった。

「さて、と」

日記を本棚に戻すと、エドワードは立ち上がった。そして、肩から下げるカバンを持ち外に出た。外は晴れ晴れとしている。六年もここに居れば、生活空間として家の周りも使っている。焚火の後があったあり、洗濯物を干すための長い木の棒がある。水源は湖だ。食料も困らない。この森に生息している動物は全て草食動物で肉もある。木の実もあるし、野菜だってある。罠だって自分で作ってやった。

さておき、家はもともとあったし、服は初めから着ていたモノが幾つもあった。
名前も新しいものがあった。首から下げたドックダグにはエドワード・S・ウェルスターと彫られていた。
言ってしまえば、生活に困ることは一切なかった。食料は自給自足となったが、それも問題は何一つなかった。

「今日はあっちに行ってみよう」

この森を調べるという名目でもあるし、今日の食料を獲りにいく目的もある。
一石二鳥というやつだ。そうして意気揚々とエドワードは森の中に消えて行った。

「お腹すい……ん？」

大きな木に背中を預け、カバンから焼きリンゴを取り出そうとしたとき、違和感は体を襲った。電気が流れた様な、ピリピリとする様な違和感。少しの頭痛に、目の奥が熱くなる。

「なんだよこれ」

涙が流れ、それを拭う。それを見てエドワードは驚いた。最初は透明だったのに、今は赤い。血だ。だが、それも数分すると頭痛と一

緒に引いて行った。残るのは体の違和感。
ピリピリとする様な違和感じゃなく、脱力感だ。

「くそっ」

全力で走った後のように心臓が早鐘を打っていた。額から汗が流れ、
よろよろと立ち上がる。
そして、その足で家を目指して歩き出した。

「はあっ、はあっ、はあっ」

木々に手を着いて家に向かって歩く。その歩みは遅く、今にも倒れてしまいそうだ。
だけど、エドワードは止まることなく歩く。理由は幾つかあるが、
心のどこかで戻らなければいけないと感じていた。

やっとの思い出、湖まで帰ってきた。家は湖の近くにある。だが、ガラスが破れるような音と共にエドワードの目の前は真っ暗になった。

「なんっ！？」

今までとは全く違う脱力感に、エドワードは倒れた。額から流れる汗の量は尋常じゃない。
このままじゃ脱水症状になり衰弱して死んでしまうだろう。

だが、エドワードは襲い掛かる脱力感以上に自分の目の前に在るものを見て驚いた。
カマキリのような鋭い二本の鎌。口裂け女の様に裂けている口。ピエロのような格好の化け物がエドワードの目の前に浮いていた。

「クケケケ。イノセンスの気配ガしたと思ったラ。人間の子供がいたヨ」

「うそ、だ」

体が震える。拒絶反応に近いソレは、エドワードを震わせた。恐怖。
それがエドワードの心を覆い尽くした。

「んマ。ちゃっちゃと死んデ」

瞬間、エドワードは黒い残像に吹き飛ばされた。

## 遭遇（後書き）

はい。ＡＫＵＭＡとの初遭遇でした。

そして、いきなり死のピンチです

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2487y/

Ｄ・Ｇｒａｙ-Ｍａｎ～転生した男～

2011年11月25日23時55分発行